

# 京都文化力向上宣言

京都文化力プロジェクトをより発展させていくために、京都文化力プロジェクト実行委員会の関係者等から、これからの京都の文化力をさらに向上させるためのメッセージをいただきました。

(五十音順、敬称略)

## 近藤 誠一

元文化庁長官  
元在米大使館公使  
元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使  
公益財団法人京都市芸術文化協会理事長

京都の魅力は、長い歴史に育まれた奥深く、洗練された文化の蓄積とそこに暮らす人々や街全体がそれをしっかり体現しているところだと思います。世界的に見れば、パリに匹敵する文化都市が京都です。平安時代から江戸期までの成熟した素地の上に明治以降、西洋から入ってきた異なるパラダイムの文明を進取の気質で積極的に取り入れ、さらに新しい文化、芸術を創り上げたという点ではパリを超えるかもしれません。

その京都に2021年度中に文化庁が移転してきます。グローバル化やIT化が急速に進む現代にあっては、目先の政治、経済課題が優先され、中長期的な投資が必要な文化、芸術にはなかなか財源が回ってきません。文化庁の京都移転は、そうした発想の転換のきっかけになりうると思いますし、またそうなくてはなりません。

京都は世界的な歴史、文化都市として知られていますが、しっとりした味わい深い本当の魅力は簡単には理解しがたいのではないのでしょうか。また、その魅力をうまく伝える情報発信の仕方にも工夫が必要だと思います。京都に暮らす人々が、日本のため、全人類のために文化力を見つめ直し自信と誇りを持って、文化、芸術の重要性を広く内外にアピールできるリーダーシップを発揮されるよう期待しています。



## 佐藤 卓己

京都大学教授

現実の京都が「文化首都」にふさわしいかどうかはともかく、それを理想に掲げる気概は京都に暮らす私たちに必要なものだと思います。刻々と変動する世界を「政治首都」や「経済首都」の視点から見ただけでは、どうしても視野狭窄に陥ります。情報社会のいまこそ、長期的な射程で全体を展望する歴史的思考が必要なのだろうと思います。

私は現在、日本マス・コミュニケーション学会会長をつとめておりますが、ジャーナリズムやマスコミの研究領域でも近年は「メディア史」研究がますます盛んになっています。先が見通せないメディア状況だからこそ、バックミラーをのぞきながら前に進むしか道はないわけです。そうした研究にとって京都は最適な学問環境です。大学人としては特に若い優秀な学生や研究者を全国、いや全世界から京都に引き寄せることができるように努めたいと考えています。京都学派はまず戦前の「政治の季節」に花開き、戦後も「経済の季節」に輝きました。「情報の季節」に三度目の百花斉放を期待しています。



## やなぎ みわ

現代美術家  
舞台演出家

京都の芸術文化を向上させていくためには、伝統工芸における「型」の継承は不可欠だと思います。京都では幸い芸術系の大学などでも、京都の伝統工芸を学べる環境が整っています。私は京都市立芸術大学で工芸を専攻し、型友禅の染色などの伝統工芸を学びました。それが今、現代美術で表現する自分の礎になっています。維持、継続していく力があってこそ前衛的なアートも生まれます。職人が長年育んできた伝統工芸、現状を変革していこうとする現代美術、京都はその2つの力が拮抗する街であるべきだと感じています。

また芸術のなかでも舞台表現には特に、表現する場所が大切だと感じており、今東九条に劇場を作るプロジェクトに参加しています。芸術の拠点ともなり、そこから新たな文化を発信できたらと思い、昨年、「東アジア文化都市2017 京都」の事業で、河原町十条の紡績工場跡地で野外劇を行いました。その際に東九条に住む在日の方や韓国在住の方にも協力していただきました。地元、全国、海外の人々と一緒に芸術活動を展開することで、京都の文化力は一層高まると思います。



## 佐々木 雅幸

同志社大学 経済学部 特別客員教授

明治時代以降、政治・経済・文化のすべてが東京一極集中でしたが文化庁の移転が決まり、京都の役割が高まっています。京都に置かれた文化庁が日本の文化行政をリードしていくことで、地方を含めた日本の社会に新たな潮流を生み出すのだと思います。今後の京都は文化遺産を多く抱える古都の魅力を維持しながら、先端的な芸術を活性化させることによって、新たな文化と産業を創造していく「文化創造都市」になる必要があると思います。

そのためには、若いアーティストやクリエイターが活躍できる「創造の場」作りが大切です。もともと伝統工芸が盛んで芸術系の大学・学校が多い京都ですが、まち全体で盛り上げていかななくてはなりません。アーティスト達がクリエイティビティを発揮できる施設や場所を増やすことが、新たな文化を創造していくことにつながると思います。近代化の波のなかでも維持されてきた、伝統的な町並みや町家を活用することもいいでしょう。美しい自然と歴史的景観とのバランスを保持しつつ、世界にひらかれた多様性のある文化が生まれることが期待されています。



## 山田 純司

公益財団法人鷹山保存会理事長

祇園祭後祭の「休み山」の鷹山が、2022年におよそ200年ぶりに巡行に復帰することになりました。山での巡行復帰に先立って、今年から八坂神社の祭神の名をしたための掛け軸を取めた「唐櫃巡行」を3年間実施します。多くの皆様のお力添えをいただき、改めて祇園祭のすばらしさ、町衆の力、そして京都の文化力の大きさを実感しています。

鷹山は1826年の巡行時に風雨で懸装品を傷めて以来、巡行には参加せず、その後山本体も火事で焼失しました。何度も復興の声が上がっては消えましたが、2012年に「鷹山の歴史と未来を語る会」を設立し、2年後には離子方ができました。2015年に設立した一般財団法人鷹山保存会が翌年、公益財団法人となり、巡行復帰への歩みに一段と弾みがつきました。

巡行復帰に向けてまだまだ足りないものはたくさんありますが、大口の寄付のほか全国から約500人の有志の皆さんが志を届けてくださいます。頂上に真松を立て、舞台に3体のご神体人形を乗せた江戸後期の姿そのままの鷹山が復活するのもうすぐ。より多くの皆さんとその夢を共有し、喜びを分かち合いたいと思っています。

